

第3節 光構内の立会調査

附属光中学校武道館新営その他工事に伴う立会調査

調査地区 光構内

調査期間 平成5年7月5日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約6.0m²

調査結果 附属光中学校武道館の新営に伴い、屋外排水管の布設が必要となった。工事は武道館から中学校校舎前の既設柵までの延長約30.0mを、幅約50cm、深さ約60cmにわたって掘削するものである。平成4年度の武道館新営に伴う発掘調査¹⁾では、古墳時代と中世の遺構面を2面検出している。遺構は土壌や柱穴などが、遺物は縄文土器・須恵器・土師器などが検出されている。また、昭和40年の附属光中学校体育館の新営²⁾では、縄文土器～中世土器を含んだ遺物包含層が検出されている。峨嵋山の裾にあたる武道館から、御手洗湾の汀に近接する体育館までにわたる遺物包含層の堆積が予想される。今回の屋外排水管布設工事は、武道館から体育館方向に向かった掘削であったため、地下の埋蔵文化財への影響が懸念された。掘削幅が狭いため、埋蔵文化財資料館が工事に際して立会調査を行い、地下の状況に注意を払うことにした。

現地表から下約30cmは、黄褐色砂(2.5Y 5/4)による表土層であった。表土層より下には、黒褐色砂(2.5Y 3/1)層が掘削範囲の地表下約60cmまで続いている。この黒

褐色砂は体育館方向に進むに従って淡くなる。また、黒褐色砂層は遺物包含層と考えられるが、わずかに近世陶磁器類の小片が数点出土したのにとどまった。

[注]

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「光構内教育学部附属中学校武道館新営に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』XII、1986年)
- 2) 福本幸夫「御手洗遺跡」(『先原史時代の光市』、1966年)

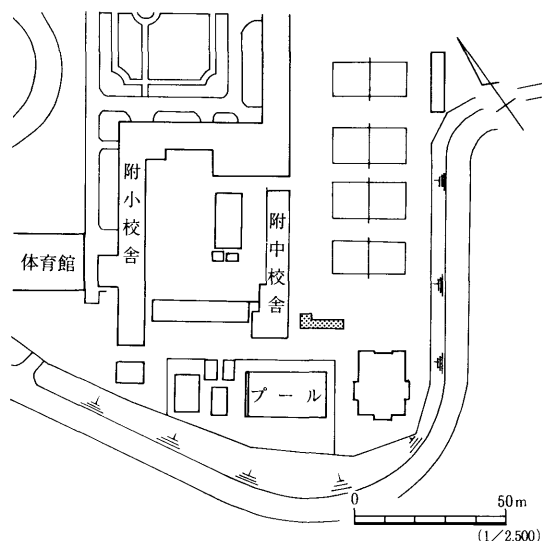


Fig. 48 調査区位置図